

# 第48回関西学院史研究会 (二〇一七・一〇・二七)

## 関西学院・西宮上ヶ原キャンパスの歴史的環境

— 関西学院構内古墳と上ヶ原用水 —

講師…中村 直人 関西学院大学文学部 非常勤講師

元関西学院大学教育学部 准教授 (任期制)

司会…舟木 讓 関西学院宗教総主事・学院史編纂室室長

会場…吉岡記念館3階 会議室1

舟木 皆様おはようございます。長らくお待ちいたしました。お時間になりましたので、第四八回関西学院史研究会を開催したいと思います。今年度は、春学期に少し事情がありまして開催できませんでしたので、今年度第一回目の研究会となります。二回目は、あとでまたご案内いたしますけれども、本日は、ここにありますように「関西学院・西宮上ヶ原キャンパスの歴史的環境—関西学院構内古墳と上ヶ原用水—」ということで中村直人先生にお越

しいただいてお話を伺うことになっております。私は、学院史編纂室長を務めております舟木と申します。本日の司会をさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

関西学院のキャンパス、今年には建築学会賞を取ったりして、非常に注目をされているキャンパスであるのですけれども、普段、目にしていないキャンパスの中には、多くの古墳であったり歴史的なものがあるということを、なかなか

か学生諸君は知りませんし、私たち教職員もあまり印象がありません。中村先生にはその辺のことを写真も交えて、非常に詳しくこれからお話させていただきます。

中村先生は、本学の文学研究科を修了され、昨年度末までは、教育学部で教鞭をとってくださいまして、今年度も、文学部のほうで教鞭をとってくださいています。本日はお忙しいなか、お時間を作ってくださいまして、私たちのために研究会の発表を担当してくださいさることになりました。このあとは、先生のほうにお渡しいたしますので、よろしくお願いいたします。

中村 はじめまして。中村と申します。本日はどうかよろしくお願いたします。

関西学院・西宮上ヶ原キャンパスとその周辺には、古墳や用水路、神社、墓地、石造物など、歴史の重なりを示すものが多いのほかに多く存在しています。我々が普段、何気なく見ている風景のなかに、上ヶ原の歴史が息づいているといえます。

今回はそのなかで、関西学院構内古墳と上ヶ原用水についてお話いたします。これらは、関西学院移転以前の上ヶ原の歴史を示す、地域の大切な文化遺産であるとともに、

学院史の前提となる、西宮上ヶ原キャンパスの歴史的環境を構成する重要な要素でもあります。すでにご存じの方も多いたは存じますが、以下に紹介いたします。

## 一 関西学院構内古墳と上ヶ原

### (一) 関西学院構内古墳

関西学院・西宮上ヶ原キャンパスの構内、社会学部の裏手あたりに、小さな古墳が一つ、ひっそりと眠っています。関西学院構内古墳です（以下、関学古墳と略称）。

本古墳は、直径約一二メートル、高さ約三メートルの円墳です。築造時には直径一八メートルほどありましたが、封土（盛り土）の流出や削平などにより、現在はひとまわり小さくなっています。古墳の内部には、埋葬施設である横穴式石室があります。本来ならば封土に埋もれて見えませんが、入口部分が崩壊して南に向けて口を開いています。墳丘の頂上付近でも石室の一部が露出し、その一角が崩落しています。

横穴式石室は、遺骸を安置する玄室げんしつと、石室の入口から玄室に至る羨道せんどうからなります。関学古墳の玄室は、奥行き四・七四メートル、幅一・五メートル、高さ二・四メートルあります。石を六、七段に積み上げて側壁とし、その上



写真1 関学古墳の石室内部

に大きな一枚岩の天井石を四枚渡しています。玄室突き当たり奥壁も一枚岩です。羨道は破壊されていて全体像は不明ですが、現存する部分は長さ五メートル、幅一・二メートルです。石室の石材には、仁川溪谷産の花崗岩の河原石が使用されました。

関学古墳からは、副葬品と人骨の一部が出土しました。副葬品は、須恵器（完存品。埴<sup>か</sup>1・坏<sup>つ</sup>1）、装身具、武器（鉄<sup>てつ</sup>鍬<sup>くわ</sup>4）、馬具（革<sup>かわ</sup>帯<sup>おび</sup>留<sup>とめ</sup>金<sup>かね</sup>具<sup>ぐ</sup>1）などです。須恵器とは、野焼きではなく登り窯を使用して高温焼成された、灰色がかつた硬い陶質土器のことです。須恵器の焼成技術は朝鮮

半島から伝わりました。埴<sup>か</sup>は壺、坏<sup>つ</sup>は皿形の容器です。鉄鍬は鉄製の矢尻（矢の先端部分）のことです。

装身具の内容は多彩です。金環<sup>きんかん</sup>5、滑石製<sup>まがたま</sup>勾玉<sup>まがたま</sup>1、琥珀製<sup>たつめたま</sup>棗玉<sup>さうぎゆ</sup>2、碧玉製<sup>きよく</sup>管玉<sup>くだたま</sup>9、水晶製<sup>すいしやう</sup>切子玉<sup>きりこたま</sup>6、ガラス製<sup>がらす</sup>小玉<sup>せうぎゆ</sup>37が出土しました。金環は金メッキを施した金属製の耳飾りです。棗玉は棗の果実に似た形の玉、管玉は細長い管状の玉です。勾玉以下の飾玉は数珠つなぎにして、首飾りなどに使用されました。

人骨は、大腿骨などの骨片と歯（二個体分以上）が出土しました。棺は残存していませんでした。おそらく木棺（木製の棺）だったのでしょう。玄室奥の床に、棺を安置したと思われる石の配列があります。

石室の構造や出土遺物から、関学古墳は古墳時代後期の六世紀後半に築造され、七世紀初頭まで追葬<sup>つしやう</sup>が行われたものと推測されます。古墳時代後期（六世紀〜七世紀初頭）に普及した横穴式石室は、それ以前の竖穴式石室と異なり、羨道入口を閉ざした石を取り除き、遺骸を追加して葬ることができます。関学古墳の被葬者は、周辺地域の有力な一家の主人とその家族とみられます。

関学古墳の調査は、関西学院の関係者によって行われました。その中心となったのが本学院教員の武藤誠氏



写真3 古写真（1935年ころ撮影）  
（武藤誠「古墳のあるキャンパス」より転載）



写真2 現在の関学古墳



図1 墳丘実測図（『関西学院考古』第3号より転載。一部加工）

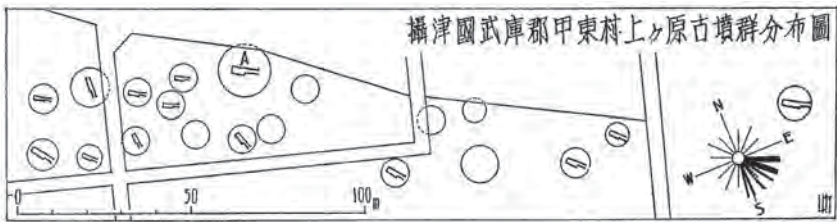


図2 上ヶ原古墳群の分布  
（小林行雄「技術から見た古墳の様式」より転載）





図3 上ヶ原の遺跡分布

[国土地理院「地理院地図（電子国土 Web）」に加筆]

(二九〇七〜九五五年)です。武藤氏は考古学が専門の歴史研究者であり、昭和七年(一九三二)より本学院で教鞭を執りました。

まず昭和十年(一九三五)、武藤氏と協力者四名による実測調査が実施されました。調査当時、古墳の石室は開口しており、内部には土砂が堆積していました。そのため、正確な測量はできませんでしたが、古墳の現状を把握し、

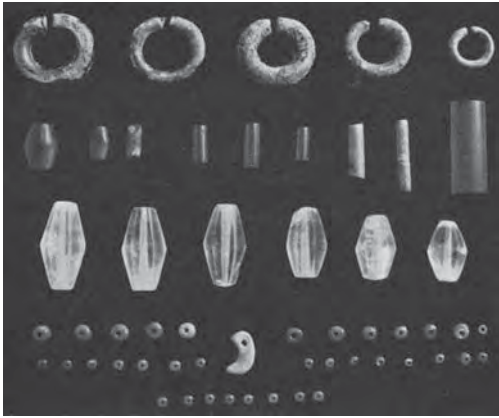


写真4 関学古墳の出土品  
〔『西宮市史』第7巻より転載〕

その重要性を提示する上で、貴重な調査となりました。

つぎに昭和三十四年(一九五九)、西宮市史編纂作業の一環として、武藤氏と文学部史学科の学生・OBらによる本格的な発掘調査が行われました。その結果、前述の副葬品と人骨の一部が出土し、関学古墳の学術的意義が明らかになりました。

以上の調査が関学関係者の手でなされたことは、本学院にとりましても意義深いことであつたと思います。

## (二) 上ヶ原古墳群

関学古墳は、これ一基のみが孤立して存在したものではありません。関学古墳を含め、かつてこのあたりには、数十基の小円墳からなる上ヶ原古墳群がありました。

古墳群のうち、上ヶ原古墳群のように、小規模な古墳が限定された範囲内に密集するものを、とくに群集墳といいます。横穴式石室をもつ古墳が多いです。群集墳は六世紀後半に爆発的に増加し、七世紀後半ころまで各地で盛んに造られました。群集墳は同族集団の家族墓の集合体です。その担い手は、小豪族・渡来人・技術者集団など多様です。以下、上ヶ原古墳群に関する記録を紹介します。

図2は、昭和九年(一九三四)に小林行雄氏が発表した

論文「技術から見た古墳の様式」(『考古学』第五卷第六号)に掲載された、上ヶ原古墳群の分布図です。現在の関学ハミル館あたりの状況を示したものと思われれます。二〇基もの円墳が描かれており、そのうちの三四基には横穴式石室が示されています。非常に狭い範囲に、小さな円墳が密集している様子がわかります。

紅野芳雄『考古小録』(西宮史談会 一九四〇年)には、「遺蹟」(上ヶ原新田墓地遺跡一引用者註)上に三箇の破壊せられたる古墳あり(以前は沢山有りしが如し)。又墓地東方に於いても約十四の古墳を認む。内三基は開口し居れど封土完存、他は封土破壊し石槨露出す。大部分は葺石を有せり。」(昭和七年一月二十四日条)とあります。上ヶ原新田墓地遺跡とは、地元の村である上ヶ原新田の共同墓地(関学古墳に隣接)の周辺に存在した、弥生時代の遺跡です。このあたりにも一〇基以上の古墳がありました。

小林氏と紅野氏の記述は、あるいは同一地域のことを示しているのかもしれませんが。

また武藤氏も、「学院移転以前の此の地の状況を知悉せる筆者の記憶によると、ハミル館及庭球部テニスコートのある辺一帯の松林には累々たる古墳の群集が見られ、石室の暴露せるものもあり、内に一基はめて完全な高さ

約二間の封土を有せるものさへあつた。之すら今はその傍すから見得ぬのは残念である。」と回顧しています(学院構内の一古墳に就て―郷土史雑記―)『甲陵』第七号 一九三五年)。

上ヶ原古墳群は、関学の裏手(西側)にある神戸市水道局上ヶ原浄水場から、関学の北西部(第1教授研究館・ハミル館のあたり)に至る、東西約六〇メートル、南北約三〇メートルを範囲としました。上ヶ原台地の西北端、台地の縁から仁川へ続く斜面にかけて築かれたこととなります。残念ながら、上ヶ原浄水場の造成(大正六年(一九一七)完成)や、関西学院の上ヶ原移転(昭和四年(一九一九)移転完了)、仁川沿いの住宅地(現仁川百合野町)の開発などにより、関学古墳および上ヶ原浄水場構内に姿をとどめる上ヶ原浄水場構内古墳の二基を残して、消滅してしまいました。

関学時計台の裏、図書館や日号館の建つあたりにも、かつて古墳が存在しました。もともとこの場所には、江戸時代初期に造られた溜池である神呪池がありました。大正三年(一九一四)、神呪寺村の人たちが池の底浚いをしていたところ、池の底から崩れ落ちた状態の巨石が出現し、その下から直刀の残欠や鐔、須恵器の坏・長頸壺などが発見



写真5 完成直後の関西学院と神呪池

(関西学院大学学院史編纂室所蔵)

されました。神呪池を造成するさい、すでに崩壊していた古墳を池の中に取り込んだようです。

昭和二十八年(一九五三)、神呪池は関学の校舎建設により潰されました。このときの調査では、古墳の痕跡や遺物は確認されませんでした。大正三年の発見時に完全に破壊されてしまったようです。この古墳は神呪池古墳と呼ばれています。上ヶ原古墳群の一員でしょう。

同古墳群はさらに南へ広がっていたようです。昭和五十三年(一九七八)、関学・文学部本館北側の植え込みにおいて、須恵器片が採集されました。採集したのは関西学院大学考古学研究会のメンバーです。また同時期の関学構内(地点不明)には、大型の花崗岩石材が数個放置されていたようです。これらは古墳の出土遺物と石室の石材と考えられます。

す。

問題はその出所ですが、法学部校舎の可能性が高いです。ちょうど同じころ同校舎が竣工しているからです。すなわち、法学部校舎の位置にかつて古墳が存在し、後世の造成により破壊され埋没しました。これが今回の新築工事で完全に破壊されて、須恵器片は廃土とともに植え込みに廃棄され、石材も取り除かれたものと推測されます。

もはや手遅れではありませんが、関学構内は埋蔵文化財包蔵地に準じた地域として、校舎などの造成時には一定の配慮が必要であると感じます。

### (三) 上ヶ原台地の古墳

上ヶ原台地には上ヶ原古墳群とは別に、古墳群を営まない独立した古墳として、車塚古墳くるまづか・入組野古墳いりぐみの・門戸天神裏古墳かどらなどが存在しました。そのなかで注目されるのが車塚古墳です。この古墳は、上ヶ原における唯一の前方後円墳であったと考えられます。現在の関西学院敷地(中学部)の南東角あたりに存在したようです。

享保十九年(一七三四)編纂の地誌『五畿内志』には、摂津国武庫郡内の「荒墳」の一つとして「車塚つかハ上原新田村」とあります。この記述から、上ヶ原新田の範囲に「車塚」



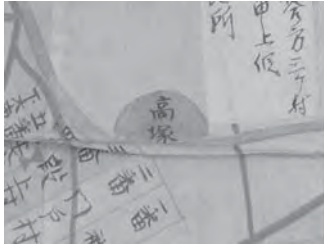


写真6 描かれた車塚古墳

塚」と称される古墳があったことがわかります。車塚という呼称は各地にみられ、たいていは前方後円墳を意味しました。

また、関西学院大学図書館収蔵の文政七年（一八二四）二月「上ヶ原新田・五ヶ庄井論争図」（段上村文書）には、上ヶ原の中央部にいかにも古墳を思わせる塚が描かれていて、そこに「高塚」と記入されています。この「高塚」と「車塚」は同一の古墳、すなわち、車塚古墳を指すものと考えられます。車塚古墳は、江戸時代の住人にとっては、上ヶ原のランドマークの一つとして意識されていたようです。

前方後円墳は日本独特の形をした古墳です。この形式の古墳を造ることができた人物は、ヤマト政権の王と、政権に参加した有力豪族にはほぼ限定されました。とても格の高い形式の古墳です。すると車塚古墳の被葬者が誰なのか、気になるところですが、残念ながらわかりません。この地域で有力な豪族の一人であったことは確かでしょう。

車塚古墳は上ヶ原で唯一の前方後円墳として意義深い古墳でしたが、大正五年（一九一六）に破壊されてしまいました。入組野古墳と門戸天神裏古墳も戦後の宅地開発により破壊されました。このうち入組野古墳の石室は、関係者の尽力により、近所の県立西宮高等学校の敷地に移築保存されています。

以上、上ヶ原の古墳を築造の順に並べると、六世紀前半から中頃Ⅱ車塚古墳・門戸天神裏古墳、六世紀後半から七世紀初頭Ⅱ上ヶ原古墳群、七世紀Ⅱ入組野古墳、となります。車塚古墳を除き、いずれも上ヶ原台地の縁辺部に築かれました。平野部を見下ろし、また平野部から仰ぎ見られる位置です。古墳は人々から見られることを意識して築造されました。このうち上ヶ原古墳群と入組野古墳の立地は、明らかに仁川からの視線を意識したものです。仁川溪谷の入口付近は、平野部に居住する人々の墓域であったと考えられます。

さて、ここで改めて気付かされることがあります。上ヶ原台地とその周辺に存在した遺跡の多くが、とくに大正から昭和初期にかけて破壊されていることです。この時期は、大阪や神戸などで市街地の拡大が急速に進み、郊外地における宅地開発が盛んに行われた時期と重なります。都市の

膨張と郊外地のベッドタウン化です。大学の都市郊外への移転もこの時期に相次いで行われました。

現在の上ヶ原台地とその周辺の基本的景観は、まさにこの時期に成立しました。上ヶ原浄水場や甲東園駅（当初は甲東園前停留所）、学校「関西学院・神戸女学院・神戸女子神学校（現関西教育学部）」、百合野町の住宅地などです。その一方で、開発の波をうけて、上ヶ原古墳群をはじめ多くの遺跡が破壊され消滅しました。時代の流れと云ってしまえばそれまでですが、とても残念に思います。そしてこの流れは、戦後の高度経済成長期において、全国的に拍車がかかることとなります。

## 二 上ヶ原の開発と上ヶ原用水

### (一) 上ヶ原新田

江戸時代の上ヶ原の話に移ります。写真7は、関学移転前の上ヶ原（関学建設予定地）を西側から撮影した古写真です。広々と連なる田畑、茅葺き屋根の民家、溜池などが見られます。関学移転前の上ヶ原は、一面に田畑が広がる農村風景が展開していました。

江戸時代に入るまで、上ヶ原はなごらく芝野（低木の生えた草地）や荒地地だったようです。おそらく、安定した

農業を営むために必要な水が得られなかったのでしょう。そのため、村落や耕地は上ヶ原台地を下った平野部に営まれ、上ヶ原は周辺村落の採草地として利用されるにすぎませんでした。上ヶ原という名称も、麓の村々から見て、台地の上の平原であることから名付けられたのだと思います。



写真7 関西学院移転前の校地  
（関西学院大学学院史編纂室所蔵）

このように上ヶ原は、人々が定住生活を営むための条件に乏しい地域でした。ところが江戸時代前期の承応元年（一六五二）ころ、大坂西成郡佃村の孫右衛門・九左衛門らによる開発がなされ、同地は豊かな水田の広がる農村へと生まれ変わりました。上ヶ原<sup>しんでん</sup>新田（村）の誕生です。

孫右衛門と九左衛門は、当時の開発請負業者です。彼らは当地域を治める尼崎藩の許可を得て、上ヶ原台地の開発に取り組みました。

上ヶ原の開発には、農業生産に不可欠な水をまず確保する必要があります。上ヶ原台地のすぐ北側を仁川が流れていますが、台地よりも低い位置を流れているので、ここから仁川の水を上ヶ原へ直接引き込むことは無理でした。そこで仁川を二キロメートルほど遡り、上ヶ原台地とほぼ同じ標高の地点から水を取り込み、用水路を介して上ヶ原まで導きました。この用水路を上ヶ原用水といいます。上ヶ原用水の開削により水の問題は解消され、上ヶ原の開発が可能になりました。

また、田畑を開墾して維持していくには、現地に居住し、農業に従事する住人の存在が必要です。そこで開拓地の住人となるべき人々が集められ、上ヶ原の地に、彼らの生活の拠点となる集落が開かれました。

この新たな住人たちは、いったいどこからやって来たのでしょうか。関学図書館収蔵文書の一つに、天明三年（二七八三）四月「切死丹宗門御制禁寺請帳」（「上ヶ原新田文書」という、上ヶ原新田の住人の宗旨・檀那寺を書き上げた帳簿があります。江戸時代の民衆は家ごとに所属する寺院（檀那寺）が決められていました。本史料は住人の出身地を直接示したものではありませんが、上ヶ原新田には寺院が存在せず、住人は実家の檀那寺に所属したまま

世代を経ているので、出身地のおおよその傾向がわかります。すると、津門村・神呪村・広田村・門戸村・中村（以上、現西宮市）や鹿塩村（現宝塚市）など、上ヶ原台地周辺の村々が彼らのおもな出身地となります（表1）。

すなわち、上ヶ原台地周辺の村々から、おそらくは農家の次男・三男たちが、可能性に満ちた新天地の住人となりました。村人の数は時期によつて増減がありますが、寺請帳の作成された天明三年段階の家数は九四軒、人口は四六八人です。

村の中心となる集落は、現在の関西学院の南西に位置する山手町の一帯です。戦前に発行された地図や地誌、たとえば図4の『兵庫県武庫郡甲東村土地宝典』（大日本帝国市町村地図刊行会 一九四〇年）には、山手町のあたりは「ヶ市」と表記されています。「かいち」と読み、小集落を意味する垣内（かいと・かいち）と同義であると考えられます。

山手町の旧集落には、村の鎮守である八幡神社が鎮座しています。社伝によると、寛文三年（一六六三）、上ヶ原台地を南に下ったところにある広田社から、祭神の一つである応神天皇を分祀して成立しました。八幡神社は村の領域全体を見下ろす位置にあり、二の鳥居のすぐ前を上ヶ原



写真8 上ヶ原用水

用水が流れています。村の中心にふさわしい立地です。

なお『甲東村土地宝典』は、やや古い地図に基づいて作成されたようです。関

西学院の敷地が田畑の区画で表現されており、関学移転前の土地利用の状況がわ

かります。「関西大学」との表記はご愛敬でしょう。また現在の関学中学部前のあたりに、地番などの表記のない、いびつな形の土地が見られます(図4の丸枠部分)。あるいは車塚古墳の痕跡を示しているのかもしれませんが(文学部講師金子直樹氏のご教示による)。

村の田畑は、一番割から十二番割まで、比較的均等な面積に地割(区分け)されました。現在、上ヶ原の各町は、一番町・二番町といった番号に基づく町名で表示されています。この町名は江戸時代の地割に由来します(ただし、江戸時代の地割と現在の町の範囲は必ずしも一致しま

せん)。地割の番号は、上ヶ原原水から取水する順番であったと考えられます。後述する分水樋ぶんすいひにもっとも近い位置に一番割(現一番町)がありました。

現在、上ヶ原の大半は市街地化していますが、二番町や六番町のあたりには、所々にまだ田畑が見られます。これらの田畑は、江戸時代に開発された新田の名残です。

## (二) 上ヶ原原水

上ヶ原新田の田畑を潤す重要な役割を果たしたのが上ヶ原原水です。用水路は仁川上流の取水口から始まります。岩場の多い仁川溪谷をしばらく遡上したところに字大井滝おおいだぎがあります。この大井滝の少し上流付近から仁川の水の一部が用水路に取り入れられ、仁川溪谷を経由して上ヶ原に達します。そして山手町に沿って南流し、上ヶ原台地を下つて東川ひがしがわ(御手洗川)に流れ込みます。その間、流れを東側へいくつも分岐させて、台地上の田畑を潤します。上ヶ原台地は西から東へ向かって緩く傾斜しています(西宮上ヶ原キャンパスを正門から時計台に向かって歩くときわかります)。この傾斜を上手く利用して、台地の高所に用水路の本流を通し、そこから流れを分岐させて、低い位置へ水を流す仕組みです。

表1 「切死丹宗門御制禁寺請帳」にみる檀那寺の分布

宗派	寺院	所在地（現在）	檀那軒数
一向宗	津門村念立寺	西宮市津門西口町	33
	田邊村常永寺	神戸市東灘区本山北町	2
	小濱村豪撰寺 (佃村正行寺)	宝塚市小浜 (大阪市西淀川区佃)	1 (2人)
禅宗 真言宗	西宮海清寺	西宮市六湛寺町	2
	甲山神呪寺	西宮市甲山町	15
	鹿塩村金龍寺	宝塚市鹿塩	11
	門戸村東光寺	西宮市門戸西町	5
浄土宗	高木村大日寺	西宮市高木東町	1
	高木村法心寺	西宮市高木西町	1
	広田村豊乗寺	西宮市広田町	14
	中村観音寺	西宮市中前田町	5
	越水村泉福寺	西宮市越水町	3
	津門村昌林寺	西宮市津門西口町	1
合計軒数			94

(註1) 佃村正行寺は請負人(佃村居住)の檀那寺。軒数より除く。

(註2) 甲山神呪寺は18C中頃まで神呪村(現西宮市神呪町・上甲東園付近)に所在。神呪村との関係が深い。



図4 『兵庫県武庫郡甲東村土地宝典』にみる上ヶ原（部分）



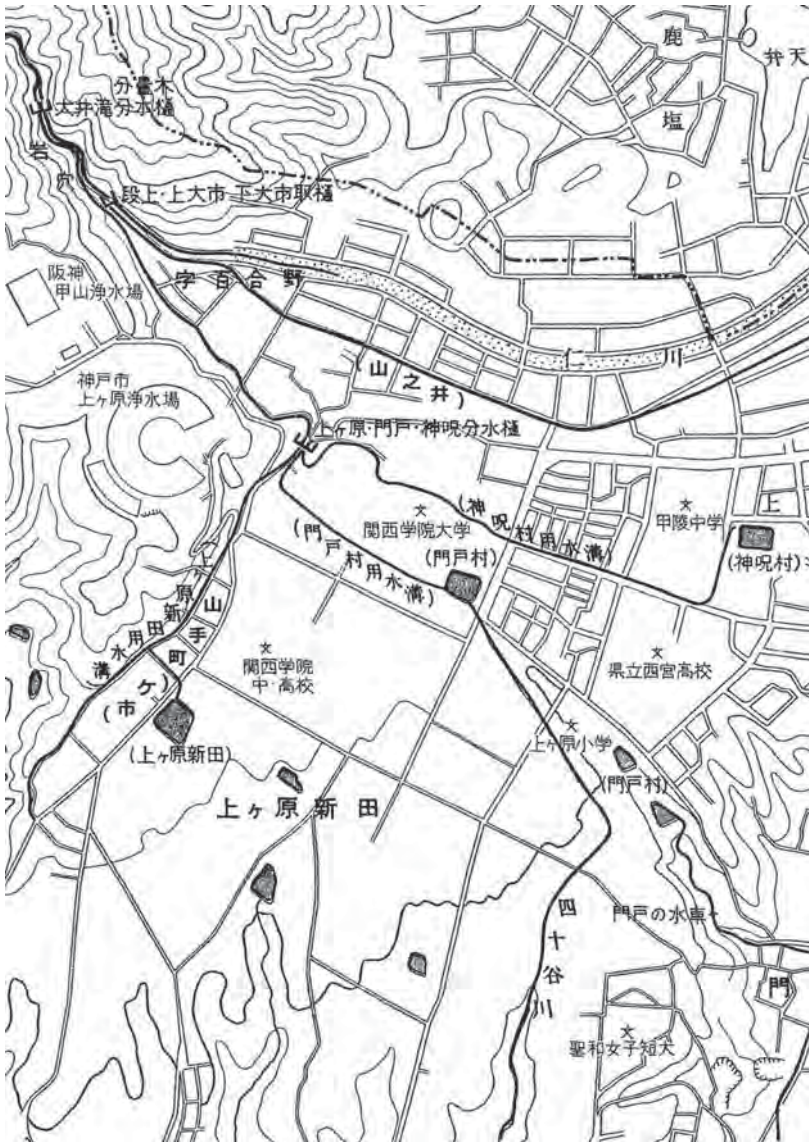


図5 大井滝用水水路図  
 (『西宮市史』第2巻付図「大井滝用水水路図」の主要部を転載。一部加筆)

ところで仁川の水は、上ヶ原新田の開設以前から、すでに上ヶ原周辺の村々が農業用水として利用していました。まず上ヶ原から見てかなり上流の湯ノ口から取水され、<sup>しよけこう</sup>社家郷（西宮町・広田村・中村・越水村）が利用しました。つぎに湯ノ口の下流において取水されて、<sup>おいち</sup>大市五ヶ村（上大市村・下大市村・段上村・門戸村・神呪村）が利用しました。

このように仁川には、これを利用する村々の水利権が設定されていました。誰もが自由に使える水ではなかったのです。仁川の水は周辺のどの村にとっても重要でした。そのため、上ヶ原の開拓にあたっては、この限りある仁川の水の分配が問題になりました。

そこで、当地域の領主である尼崎藩主青山幸利の取り計らいにより、社家郷は湯ノ口での取水量を減らして上ヶ原新田に水をまわし、社家郷の不足分は藩費で池を掘って補填することが決まりました。上ヶ原新田と大市五ヶ村の間でも協定が結ばれました。関学図書館収蔵の承応二年（二六五三）十一月朔旦「仁川新井溝下荒地村割り証文」（上ヶ原新田文書）によると、仁川の水を上ヶ原新田が利用する条件として、これまで大市五ヶ村が使用してきた水量（先規より之分量）は維持されることが合意されています。

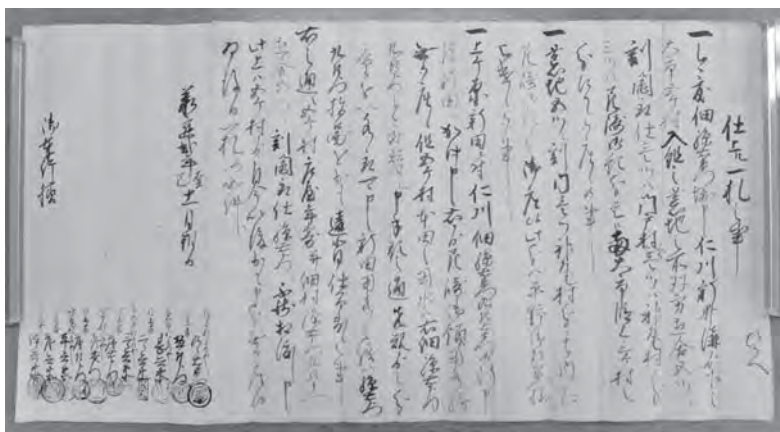


写真9 「仁川新井溝下荒地村割り証文」  
（関西学院大学図書館収蔵）



写真10 溪谷沿いの用水路



写真11 伏樋

こうして仁川をめぐる村落間の利害は一応調整され、上ヶ原新田の水利権が確定しました。

上ヶ原用水の開削には多くの労力が必要とされました。仁川上流の取水口（大井滝堰）から上ヶ原新田の入口まで、およそ二キロメートルあります。この間は仁川沿いの傾斜地に用水路を通すのですが、とくに大井滝堰から約八〇〇メートルの間は、急峻な岩山が川の両岸に迫る溪谷であり、用水路の開削はなかなかの難工事となりました。岩を割り、石垣を築き、伏樋（地下水路）を掘削するなどして、やっとのことで用水路を通したのでした。

明和五年（一七六八）、仁川の洪水により、大井滝付近の用水施設（堰、水路の石垣、岩場に渡した<sup>かたみ</sup>笥など）が大

破してしまいました。大井滝のあたりは水の勢いが強く、これまで何度も用水施設が破損しています。そこで上ヶ原新田の人々は、恒久的な水路の構築に取り組みました。すなわち、従来の堰の少し上流に新たな大井滝堰を築き、その脇にある岩山を七〇間（二二七メートル）にわたって掘り抜いて水路を通し、これを既存の用水路に接続させました。岩穴は、着工から三四年余りが経過した享和三年（一八〇三）に完成しました。

それでは、人々が心血を注いで整備した上ヶ原用水を、上流に向かってたどってみましょう。

関西学院裏手の分水樋付近から地すべり資料館まで、上ヶ原用水に沿って散歩道が続いています。この道を仁川との高低差を感じながら進むと、やがて地すべり資料館に至ります。地すべり資料館のある一帯は、一九九五年一月の阪神・淡路大震災で地すべりが発生した現場です。この地すべりによって三〇人以上の人命が失われ、用水路も破壊されました。

地すべり資料館を過ぎると仁川溪谷に入ります。用水路は溪谷の急斜面に沿って、狭い山道と並行して流れます（写真10）。水の獲得にかける先人たちの思いが伝わってくるような場所ですが、現在、地すべり資料館から先へは、危

険につき立ち入りが禁止されています。

用水路はやがて岩に突き当たり、伏樋になります（写真11）。そして再び地表に出ると、今度は岩壁にぶつかります。岩壁は縦に深く掘り込まれ、その掘り込みの底を用水が貫流します（写真12）。岩を穿った箇所には、今でも当時の鑿たがねの跡が残っています。

やや怖い思いをして岩壁を通過すると、広い岩場（岩山）に出ます。上ヶ原用水はこの岩場を隧道すいどう（岩穴・トンネル）で突き抜けて流れていきます。岩場を過ぎると大井滝堰の取水口に至ります。大井滝付近には、岩と岩を繋いで用水路を通す石垣なども見られます。



写真12 岩壁を割る用水路

### (三) 分水樋

関西学院の裏手に上ヶ原用水の分水樋があります。分水樋とは、用水路の流れをいくつかに分ける堰のことです。上ヶ原用水はここで、上ヶ原新田（山手町方面）に向かう上ヶ原用水の本流と、門戸村・神呪村に向かう流れとに分かれます。用水路の下流方向に向かって、右手の幅広い流れが上ヶ原用水です。左手の二つの流れのうち、右側は門戸村、左側は神呪村へ向かいます。門戸村と神呪村への用水路は、分水樋の先から左手（東）へ折れ、関学構内を貫流します。

それでは、なぜ上ヶ原新田のために造られた上ヶ原用水から、門戸村・神呪村へ水が分けられたのでしょうか。

嘉永五年（一八五二）、上ヶ原新田と段上村・上大市村・下大市村の三ヶ村との間で、仁川の水をめぐる争論が発生しました。争論の背景には、旱魃（日照り）による水不足の問題がありました。そして安政三年（一八五六）ころに和談が成立しました。その内容ですが、大井滝堰の上流に、大市五ヶ村の持ち山である五ヶ山があります。この五ヶ山の谷に、段上・上大市・下大市の三ヶ村と、三ヶ村と同じ井組いぐみ（水利管理の村落連合）の門戸村・神呪村、そして上ヶ原新田の六ヶ村が、力を合わせて旱魃対策用の溜池を新





写真 13 分水樋

最後に分水樋からの流路を確認します。上ヶ原新田に向かう本流

派に果たしています。も水を分ける役割を立派に果たしています。恣意的に改変されないように、分水樋は花崗岩でしっかりと造られています。そして今でも水を分ける役割を立派に果たしています。

たに造成し、その水を共同利用するというものです。同四年、新たな溜池（新池）が完成しました。現在の五ヶ池です。そして新池の造成と同時に、仁川の利用形態に変更が加えられました。門戸村・神呪村の取水権が新たに設定され、その水を上ヶ原用水に流すことになったのです。すなわち、大井滝堰において上ヶ原新田と門戸村・神呪村の水を同時に取水し、その合水を上ヶ原用水に流すのです。三ヶ村の水が流れる上ヶ原用水は、関学裏手の分水樋において、各村へ向けて三つの流れに分岐します。分水樋の溝の幅は、上ヶ原新田 $\parallel$ 三尺六寸二分（一一〇センチ）、門戸村 $\parallel$ 五寸六分（一七センチ）、神呪村 $\parallel$ 六寸六分（二〇センチ）です。溝の幅が

は、途中でいくつも分岐して上ヶ原新田の田畑を潤します。門戸村に向かう用水路は、関学のB号館前を通過して日本庭園の池にいったん入り、そこからさらに門戸池に流れ込みます。門戸池からは上ヶ原小学校の方向へ流れ、やがて南流して四十谷川となり、岡田山と愛宕山の間を通過して上ヶ原台地を下っていきます。

神呪村への用水路は、かつては時計台のある大学の中心部分を貫流し、甲陵中学校の東にあった神呪村の溜池に注ぎ込みました。現在は神呪村の池が消滅したためか流路が変わり、時計台の正面を横切って中央芝生の脇（経済学部・中央講堂の前）を通り、門戸池に入っています。

門戸池とは、法科大学院前にある新月池のことです。きれいに整備されたこの池は、あたかも法科大学院を飾る池泉のように見えますが、今も昔も門戸村の溜池です。B号館前の水路も見栄えよく整備されていますが、これも門戸村の用水路です。これらは地元の水利権者（門戸農会）の管轄下にあり、関学の所有物ではありません。

以上、さして広くもない上ヶ原の地ではありますが、古代の古墳、近世の上ヶ原新田と、人々の営みが積み重ねられてきました。残念ながら古墳はほぼ消滅し、村の田畑も



激減してしまいました。けれども、関学古墳は上ヶ原の古墳の貴重な生き残りであり、上ヶ原用水は現在も生きています。そしてこの歴史の重なりの上に関西学院もまた加わって、今があるのだと思います。

話が長くなつてしまい恐縮です。ご静聴のほど、どうもありがとうございます。

舟木 本日は貴重な資料をいろいろご紹介いただきましてありがとうございます。ちょっとフィールドワークをしたい感じがいたしますが、また、第二弾、三弾の研究会発表がありますでしょうか？是非またお越しいただければと思います。

中村 実は去年、上ヶ原の歴史についてまとめた『歴史のなかの上ヶ原』という本を書きまして、今回の話は、その内容の一部をつなげたような形になっております。たとえば、皆さんは、関西学院が戦時中、西宮海軍航空隊だったことをご存じでしょうか？さすがにご存じの方が多いですね。それから阪神大震災。震災も今や歴史の一部となりました。また甲山の周辺には、大阪城の石垣用石材の採石場跡があります。このような話について調べたことが書いてあります。そういう話ならできます。

舟木 ぜひ機会を設けてまたお願いしたいと思います。また、よろしく願います。中村先生に、もう一度感謝の拍手をお願いいたします。どうもありがとうございます。

また、今年度第二回目、第四九回の学院史研究会が決まっております、一二月五日の二時三〇分から一五時まで、場所は図書館ホールを予定しております。主題といたしましては、久留島武彦という関西学院のOBの方をご存じでしょうか？実は、この方はデンマークの有名な童話作家のアンデルセンをデンマークでも再評価することに尽力された方で、その方を記念する記念館が今年度大分の方にできてまして、その「久留島武彦記念館」の金館長にお越しただいて、そのお話をさせていただく予定です。また、ご案内いたしますけれども、一二月五日の二時三〇分から一五時まで図書館ホールで行いますので、またお時間がありませんでしたら、ご参集いただければ幸いです。

それでは、これで本日の研究会を終了いたします。ご参集どうもありがとうございました。

#### 【主要参考文献】

- ・『西宮市史』全八巻（西宮市役所 一九五九～六七年）
- ・関西学院大学考古学研究会「仁川流域の後期古墳」（『関西学

- 院考古』第三号 一九七六年)
- ・ 関西学院大学考古学研究会「関西学院構内採集の須恵器」  
〔『関西学院考古』第五号 一九七九年〕
- ・ 武藤誠「古墳のあるキャンパス―関西学院構内古墳と私―」  
〔『関西学院考古』第七号 一九八一年〕
- ・ 大崎正雄「上ヶ原の歴史と文化財(一〜二六)」(西宮コミュニティ協会『宮っ子』所収「うえがはら」第二三三〜二五九号 二〇〇三〜〇六年)
- ・ 中村直人『歴史のなかの上ヶ原 西宮市上ヶ原、古墳から震災まで』(関西学院大学出版会 二〇一六年)